震災教訓の共有むすび塾@インドネシア（河北新報社と共催）

掲載日:2013 年 04 月 23 日
(C)河北新報社

むすび塾 インドネシア入り

スマトラ沖地震 移転集落や遺構視察

【バンダアチェ＝報道部・高橋鉄男】防災ワークショップ「むすび塾」開催のため、河北新報社が国際協力機構（JICA）と合同でインドネシアに派遣した訪問団は22日、2004年のスマトラ沖地震で、巨大津波の被害に遭ったアチェ州の州都バンダアチェ市内を視察した。23、24日のワークショップに参加する東日本大震災の語り部たちは、スマトラ沖地震の被災状況や復興の現状を学んだ。

（3面に関連記事）

いのちと地域を守る

「忘れない」大切さ実感

現地住民らと意見交換へ

スマトラ沖地震津波の死者・行方不明者は、インドネシアで16万人を超え、バンダアチェ市だけでも6万人に上るという。市人口は、被災直後の約19万から復興特需で約23万（11年）まで回復。一方で、新規流入者や津波を知らない世代が増えたため、教訓の伝承が心配されている。

訪問団には語り部として、東松島市の貝田行政区長中山勝文さん（67）、大崎市の水難学会指導員安倍志摩子さん（51）、多賀城市の東北学院大3年渡辺英莉さん（20）が参加している。

一行は、津波被災に伴い高台移転した集落や市中心部の津波博物館を見学。津波災害の象徴として、船が屋根の上に乗った状態で残されている家も訪れた。

この家は市が船ごと購入して保存し、住民の祈りの場になっている。

市災害対応局の担当者は「災害を忘れたい思いもあるが、津波の記憶を刻み続けようと判断した」と説明。語り部たちは「震災を忘れない取り組みの大切さを、あらためて感じた」と話した。

23日は被災後に住宅を現地再建したムラクサ地区、24日は高台移転したロク・スデュ地区でむすび塾を開き、現地住民と意見を交わす。教育、宗教関係者との座談会や、市主催の防災・減災シンポジウムにも参加する。

アチェ州 インドネシア・スマトラ島最北の州で人口約520万（2010年）。04年のスマトラ沖地震では被害の9割が同州に集中した。中央政府は05年4月、同州に復興庁を設置。海外支援を含む総額7000億円を投じて住宅14万戸を再建。インフラ整備や農地再生も進んだ。アチェでは地震当時、独立派武装組織「自由アチェ運動」と国軍が内戦中だったが、地震を機に和平機運が盛り上がり05年8月に和平合意した。

津波で住宅の屋根に乗り上げた漁船の前で、現地ガイドの説明を受けるむすび塾の語り部たち（中央）＝22日現地時間午後5時30分、バンダアチェ市（写真部・佐々木浩明）